

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

現代中国語の余剰否定現象の研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2285

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



姚碧玉氏の博士論文審査について

博士論文審査の要旨

現代中国語に否定極性要素が存在することで結果として否定を表すのにも関わらず、さらに否定辞（不・没）が生起することがある。意味の単純な合成を考慮すれば、二重否定となることが予測されるが、多くの例で二重否定と解釈されず、単純な否定であるとみなされることがある。本論文は、朱德熙以来長い間「羨余否定」（余剰否定）として中国語学で知られてきたこのような問題を、語用論的なアプローチに頼らず、語彙の観点から文意の結果解釈の予測が可能である点を指摘した言語学的研究である。中国語学における「余剰否定」は、(1) 中国国内の多くの研究者は認知言語学的あるいは語用論的分析を多様に駆使し、その分析手法が過度に複雑になっていたこと、(2) さらに余剰否定現象にかかわる副詞は多岐にわたるにもかかわらず、多くの先行研究ではほとんど一つの副詞についてのみ言及したものであり、その統一的説明がないこと、など多くの課題が山積する領域であった。

本論文の各章では、(1) 差点 (2) 险些 (3) 几乎 (4) 难免 (5) 好不の各副詞が内在する否定極性の認定を行ったうえで、それぞれが否定副詞「不/没」と共起した際に生じる文意の結果解釈について CCL データベースなどのコーパスを主として用いて分析した。

本論文はさらに理論的な分析を行う必要のある箇所も多く存在するが、余剰否定現象に関わる副詞と直後に現れる要素の膨大な組み合わせを網羅的に分析し、語彙意味論の大きな可能性の提示と、発話者の主観的な意図に左右されない結果意味解釈の予測に成功している。

以上の理由により、本審査委員会は、本論文が博士学位請求論文として、一定の基準に達しているものと判断する。

論文審査結果

本論文では序章において、言語に関わる余剰性の問題を整理した上で、否定の種類に語否定と文否定の違いがあることと、二重否定と余剰否定の相違点を指摘する。さらに余剰否定がフランス語やいわゆる「黒人英語」などに見られることも紹介する。加えて、中国語における余剰否定の研究史を概観し、本論文で扱う研究対象を副詞（「差点」「难免」「险些」「几乎」「好不」）とそれに後続する要素(VP, AP, NP)に絞り、意味合成の実態と結果事態解釈の対応関係を記述する流れについて説明している。

第 2 章では、全体の分析の基軸となる「差点」の余剰否定現象を記述する。ここでは、研究対象である余剰否定現象の定義を行った上で、主たる先行研究である朱德熙(1959)、江藍生(2008)などの紹介と問題点を指摘した。多くの研究者は余剰否定現象を語用論的なアプローチから分析してきたが、筆者は朱德熙(1959)の語彙意味論的アプローチをさらに精緻化

することによって、当該現象をより客観的に分析できると考えている。朱(1959)の分析では「語彙的な望ましさ」と「発話者の期待」を同じレベルで扱うという不十分な点が存在することを指摘する。本論文の立場として、「差点」に後置される VP を語彙的な望ましさが認められるもの、語彙的な望ましさが無いもの、そのどちらの指定がないものの 3 種類に分類する。その最後のものについては儲澤祥(2000)の分析などを基礎に、デフォルトとノンデフォルトの分類を導入し、デフォルトの事態は語彙的に望ましい VP と、ノンデフォルトの事態は語彙的には望ましさが無いものと並行的な振る舞いを見せることを主張する。

第 3 章では「險些没 VP」の分析を行い、これに余剰否定現象が認められることを主張する。第 2 章の「差点没 VP」で記述したモデルを援用して分析すると、語彙的に望ましい VP は真性否定に、望ましくない VP は余剰否定に解釈されるなど、「差点」の場合と全く同じ振る舞いを見せると分析している。

第 4 章では「几乎没 VP」の分析を行う。先行研究では余剰否定現象の存在を認めているが、本論文で取り扱った CCL のデータベース上では全て真性否定として解釈されるものしか発見されなかった。先行研究と本論文の結果が異なるのは、従来の分析が「差点没 VP」と「几乎没 VP」が共通であると仮定して進められたものであるからだと主張する。

第 5 章では「难免不 VP/AP」「难免没 VP/AP」の記述を行う。そもそも「难免」そのものが、二重否定であるが、「难免不 VP/AP」の結果事態の解釈が「差点没 VP」のパターンと全く同一になることが重要な点である。

第 6 章では「好不 X」のデータとその振る舞いの記述を行う。ここでも X の語彙的な望ましさを評価した上で、全体の結果解釈の分析を行う。しかし、CCL のデータベース上での分析はほぼ 9 割が余剰否定であり、X の語彙的な望ましさはほぼ関与しないことが指摘された。また同データベース上では語彙的な望ましさが関与しないような X は全体で 5 例しか発見されず、その場合の X はいずれも心理形容詞であることがわかる。

第 7 章は結論と今後の課題を述べる。従来余剰否定現象を語用論的な角度から分析する研究が多かった。本論文では、余剰否定に関わる副詞と直後に現れる要素との組み合わせを分析すれば、直後に現れる要素の語彙的な望ましさが強く関与することが判明した。ただし、語彙的な望ましさが指定されないものについて導入したデフォルト解釈の取り扱いは今後十分な検討が必要とされる。

付録として CCL データベースで得られた余剰否定現象のデータについて語彙的な望ましさに基づいた基準で分類したものを網羅的に掲載している。これにより、副詞に後置される VP(動詞語根は上野恵司編 1997. 『中英日韓対照 分類中国語基本語彙』白帝社. より選別)の基本的な部分については余剰否定現象の詳細な見取り図が得られたこととなる。

以上概観したように、本論文は副詞の直後に現れる要素を語彙的な望ましさやデフォルト解釈によって分類することにより、可能な限り簡潔な手法で客観的に余剰否定現象に置ける結果事態解釈の予測が可能となることを示した点で、現代中国語研究に対する大きな

貢献をなしたと評価できる。言語の経済性に照らし合わせればなぜ余剰否定現象が好まれるケースが存在するのかなど、その理論的な分析が十分でないところはあるものの、本論文がともすればアドホックで恣意的な解釈に陥りやすい余剰否定現象の分析を統一的行った点は高い評価が与えられる。

最終試験結果

最終試験は2017年2月2日午前10時から、本学の三木記念会館で実施され、林範彦(主査)、任鷹、下地早智子の3名の本学教員と、神戸大学の定延利之教授が審査にあたった。審査は公開で行われた。冒頭、学位申請者が論文要旨に関するプレゼンテーションを行った。そののちに各審査委員が論文に対する意見や感想を述べると同時に質問を行い、申請者がその各々について回答するという形式で進められた。本論文は日本語で記述されたため、論文要旨の説明と審査委員との質疑応答もおおむね日本語で行われたが、任鷹審査委員との応答では中国語が用いられた。

審査委員からは、先行研究の整理の問題(特に朱德熙の分析に対する解釈について)、副詞に後続する要素の「望ましき」の基準の問題、類例の提示方法、機能主義的アプローチに対する諸問題などの多くの問題について質問とコメントがなされた。今後の課題を多く指摘されることとなったが、審査委員の質問に対して申請者は本論文の立場に立って、誠実かつ十分な回答を行ったと判定される。

公開審査の終了後、全審査委員で合議を行い、本論文が具体的で豊富な言語データの収集実績とその分析手法の一貫性・統一性において優れた研究成果であると認められ、中国語学において大きな貢献をなしうるものであると高く評価できる点で合意が得られた。その結果、最終試験の評価を「合格」とすることが決定された。

以上である。